

HUBchar i事業立ち上げなど社会企業について

講師：川口 加奈（NPO法人Homedoor代表）

指導教員：永田 潤子 准教授

日時：平成27年（2015年）6月18日（金）午後 6 時 30 分～9 時 20 分

場所：梅田サテライト6階 107教室

議事録担当：M1 林田 雄三

1. はじめに

今回の講師は、関西経済界におけるリーダー方々の会合にて、講師の父兄とご縁があった。今回の講義では、物事において批判することは容易だが、自ら行動する行為を学び、実社会における実例として触発されることを期待する（指導教員）。

2. 学生時代・ボランティア活動のきっかけについて

NPO法人Homedoor代表は、大阪市立大学経済学部出身で大学2年生時にNPO法人を設立。ホームレス問題に対して「路上生活から脱出する支援を実現したい」「だれでも何度でも挑戦できる社会をつくりたい」想いで設立された。

NPO法人Homedoor代表が14歳の頃、釜ヶ崎（あいりん地区）・新今宮を通過する機会があり、ホームレス問題に興味を持ったことがきっかけ。友人は、通学経路を変更・迂回して通学する状況もあった。

親への反抗・反発精神も乗じて、クラブ活動（バスケットボール部）に参加すると偽り、密かにボランティア活動への参加を始め、現場でのおにぎり配付ボランティアに参加。そこで、ホームレスの方々の中には、貧困家庭・児童施設・片親の家庭で育った環境の方々が多く、親に頼れない等の背景もあり、貧困連鎖の深刻さを感じた。また、非正規雇用・日雇い労働の出身も多く、そういった雇用形態に従事する人は正規雇用 비해、ホームレスになり得る可能性が高いと言える。

3. 近年のホームレスの実態、非正規雇用・日雇い労働について

社会実態の1つとして、原子力発電所施設のメンテナンス業務を請け負う業務があり、健康に影響があった場合の賠償請求等のトラブルを回避することを目的として、このような危険な業務は、正規雇用ではなく日雇い労働者をはじめとする非正規雇用者が従事する形態が横行。

また、大阪市内では年間213名の方々も路上で餓死された状況がある。NPO法人Homedoor代表が、14歳の時には自分自身にもホームレスの方々に対する偏見と差別意識や、自業自得と考える意識があった。

近年には、世間でホームレスを襲撃する社会現象・社会問題も発生した。襲撃した若者の持論は、社会からゴミ（ホームレス）を一掃している気持ちとのことであった。

これらの実態を「知ったからには、知った側の責任がある」という思いから、学生時代には、全校集会で発表する機会も得たが、寝て聞いていない学生も多く、心が折られることも度々あった。次のアクションとして、ホームレス問題をパソコンではなく、あえて手書き・手作りで「学内新聞」を発行したことや、2泊3日のワークショップ等も実施。このような取り組みが認められ、学生時代にはボランティア親善大使として、ワシントンDCにも派遣された。

しかし、アメリカで知り合った他国のボランティア親善大使は、寄付事業を1,000万円以上を集めるな

どの事例もあり、社会でよさそうなことをしたいだけなのか、本気で社会・構造を変えたいのかを問われ、考え方・取り組み方にスケールの違いを感じた。

当時、大学進学を控え、高校卒業後の進路を考えた結果、大阪市立大学は「ホームレス研究」の草分け的存在でもありここへの進学を決めた。

4. 「カフカの階段」について

ホームレス状態を生み出さない日本にするため、ホームレスの人の「ニーズの代弁者」を意識して活動してきた。「カフカの階段」という言葉があるように、少しずつホームレスになってゆくプロセスは、小さな段差の階段を一つ一つ降りてゆくようなもの。しかし、ひとたびホームレス状態になってしまうと、そこから復帰するには「少しずつ降りてきたその階段を、一気に1回でのぼる」ようなものであり、もし失業した場合、貯金を崩し人間関係疎遠になり、住所・連絡先を失う。そこから脱出するには、仕事・賃金に加え、同時に住所・連絡先・資格等が必要となる。

NPO法人Homedoorは、中間的な就労機会の創造として、自転車修理等の仕事を作ることで、路上からの脱出づくりをしている。

5. HUBchari事業「ノキサキ貢献」について

レンタサイクル・シェアサイクルを事業にすることで、就労を支援する場所・機会を創造できるのではないかとして事業化を目指す。

各地の行政や、不動産会社に対しては「軒先貢献」として飛び込み営業訪問を実施（300件～400件）。その結果、社会実験として期間限定ではあるが暫定的に「軒先貢献」HUBchari事業が実現した。

結果、ワールドビジネスサテライト等の各種メディアで取り上げられ、観光ホテルに初めて常設スペースが実現。

その後、支援体制・協力の輪も徐々に広がり「積水ハウス」「大阪ガス」等の支援協力が徐々に整う。

6. ホームレス（おっちゃん）の現状・想いについて

ホームレス経験者は、人生経験・苦労経験も多種多様で、貧困家庭・児童施設・片親の家庭環境が多く、親に頼れない背景があり、貧困の連鎖が深刻。

また、人生経験・苦労経験も多種多様で、看板作成・自転車修理 etc…いろいろな技能を習得しているが、ホームレスには、非正規雇用・日雇い労働の出身が多く転落しやすい可能性が高い。

Homedoorでも、年配の男性（おっちゃん）を採用面接するが、世間的には、50代の男性等は、正社員再雇用は困難な実態。現在では、おっちゃん（ホームレス）に対して給与も継続して支払うことが可能となり、おっちゃんが事務局に差し入れや、パースデーケーキをプレゼントしてくれる嬉しいエピソードもあった。

7. NPO法人 Homedoor の各種事業・これからについて

ここ近年は、大阪への外国人観光客の増加もあり、HUBchari事業は安定事業に成長。今後はHUBchari事業の他に各事業を育て、ホームレス脱出の選択肢を1つでも多く提供できる体制にしていきたい。現在、注力している事業として「HUBgasa」「ホムパト」「&ハウス」「釜Meets」（別紙レジュメ参照）がある。

何が支援・サポートできるきっかけになるかわかならいたため、多種多様な側面から支援策を検討・実施（落語・調理実習等…）している。将来は、昼寝ができる・自炊ができる・洗濯ができる施設も作っ

ていきたい（&ハウス）。

これまでは延べ130名の就労支援の内、約55%が再雇用につながった。支援するための入口部分・窓口を明確にしていくことを意識して、毎月第2火曜日には炊き出し（釜Meets）をしている。夜にホームレスの方々の元に食料品や生活用品を配付しながら巡回相談を行う活動（ホームパト）も定期的に行い、状況の把握や組織の存在を理解していただく活動を日々している（啓発活動）。

今後は、ネットカフェやファストフード店がホームレス直前の居場所になっている状況を変えるべく、高校2年生の時に書いた絵を元にしたホームレスの人向けのシェルター施設を作ってていきたい。

8. まとめ

NPO法人Homedoor代表自身のモチベーションや、行動できるエネルギー源は、「知ったからには知った者の責任がある」を基本として活動してきた。みなさまもこれを機に「知った側」として、今後さまざまなボランティア活動に参加・意識していただけることに期待したい。

9. 質疑応答

Q. (Ma) 尼崎・武庫川河川敷周辺にもホームレスの方々が多いが、行政として食料支援はするが、就労支援はしていない。行政には何が求められているのか、取っ掛かりとしてどのような対応をしていけばよいか。

A. 河川敷の方々は、独立して生活を行っている人が多く、現状からの移行を諦めている人が多い状況です。特に、廃品回収で生計を立て、ペットを飼う人も多い傾向が見られます。私たちは、ホームレスをゼロにすることよりも、路上脱出の方法を提供することに注力している。行政としてはカフェテリア型支援メニューとして、ホームレスの方々にわかりやすく提示することを繰り返してはどうか。ちなみに淀川では、洪水があった外部要因もあり、ホームレス人数が減少傾向しているという報告もありました。

Q. (I) NPO法人Homedoorは、NPO法人事業として成功しているように見えるが、協力してほしいこと、望んでいること、困っていること、目標等を訊かせてください。

A. NPOの一般的な財源としては、①事業収入 ②行政の委託収入 ③助成・補助金収入 ④寄付収入等がある。日本ではホームレスに対する偏見が根強い中で、寄付収入がまだまだ少ないため、集める知恵を思案中である。
行政も法律や運営基準等に基づき、ドヤ街・シェルター・自立支援センターに対する支援体制もあるが、ホームレスの現場ニーズに合わせ、民間のチカラで環境を整備していきたい。

Q. (Shi) これまで、河川管理者として大阪市内を水都大阪とすべく河川をキレイにしていく取組みを担当してきた。ホームレスには、犬などの動物を飼う方々も多いが、NPO法人Homedoorの対応はどのような対応をしてきたか

A. これまで、河川敷の方々は犬などの動物を飼う人も多いのですが、私たちが対象としているのは、街中において路上脱出を目指される方なので、そういった方々は動物を飼っていないケースが多く、あまり問題にはなってきませんでした。

Q. (Mo) NPO法人Homedoor創設期の飛び込み営業は、心が折れるような対応や扱われ方も多く、大変な勇

気・苦労が必要であったと思う。これらの取り組みを続ける秘訣・モチベーション維持の秘訣は何か。また、地方・田舎にはホームレスは少なく、逆に多方面において、就労人員不足もあるが、これらの課題点を合わせて解決していくことはできないか。

A. 続ける秘訣・モチベーション維持は特に意識したことはない。当初、飛び込み営業は心が折れたが、辞めれない状況に自分を追い込んだことはある。

例えば、おっちゃんが就職することにモチベーションを依存すると過度な期待につながるため、人に依存せず、たんと業務をすることを意識している。

実は、大阪市内のホームレスは、仕事や賃金を求め、地方・田舎出身が多い。また、地方・田舎は、逆に人材不足かもしれないが、ホームレスは、田舎の狭いコミュニティで仕事することに抵抗感を持っている。農業や介護の業種には、ホームレスの特技・ニーズにマッチしていない。これは、住み慣れた街（大阪）を離れて田舎で働く選択は、減少傾向ではないか。

Q. (Fu) HUBchari事業と行政との関係について伺いたい

A. 大阪市の区長が公募制になり、刷新性を求めて、問い合わせ・事業取り組みが前に進んだ。しかし、行政特有の人事異動制度や、区長交代で、業務の継続性が困難であることを感じた。一方、迷惑自転車対策と関連して、業者選定時における仕様書の中で、生活困窮者を含める条件が加わってきたため、HUBchari事業と関連して、取り組みやすい環境になった。ホームレスの方々にとっては、地域に感謝される仕事、コミュニケーション能力を養える業務のため、対応しやすい状況と言える。

Q. (shi) 日本でホームレスを生み出す構造上の問題点は何か

A. 日本の社会は、使い捨ての労働形態であることも問題のひとつである。この仕事を通じて、多くの社長と接することも多く、雇用者側の苦悩も聞くので、非正規雇用が増えることはしょうがない側面と感じている。中小企業の社長自身もホームレスになるリスク・可能性も高く、解決への具体的なアイデアはまだない。

Q. (Mi-M2) 寄付・サポーター登録について詳細を教えてください

A. NPO法人Homedoor事業を支えていただくために、寄付制度やサポーターを募っている。クレジットカードでの決済で、毎月定額をご寄付いただくシステムです。

Q. (0-修了生) 子育て支援NPOをしているが、ホームレスの方々自立しやすいタイプや、ホームレスの期間について伺いたい

A. ホームレス期間が短ければ短いほど、脱出できる確率が高い。ホームレス期間が長い場合は、脱出しても困難・苦労があると、路上生活への抵抗感の低さから、ホームレスにまた戻る傾向がある。また、期間が長くなればなるほど、精神的な疾患を抱えるケースも多く、脱出できる確率が低くなる。平均3～4年が多い。

Q. (MI-D2) ホームレス予防対策について伺いたい。

A. 深夜営業店舗で過ごすホームレスの人を対象に、生活相談窓口の告知活動をもっと提供していきたい。また、上述のようなシェルター施設を作って脱出する道を作りたい。

以上